

秋田県立大学「人類の持続可能な発展に資する科学技術」
「苗」研究のエントリーシート

研究テーマ	高齢者犯罪を防止するための再帰属訓練プログラムの開発・研究		
研究代表者	渡部 諭	役職	教授
フリガナ	ワタナベ サトシ	学位	教育学修士
学科等	総合科学教育研究センター	Eメール	watanabe314@akita-pu.ac.jp
主な共同研究者(学内)			
主な共同研究者(学外)	澁谷泰秀（青森大学社会学部教授）		
研究の内容			
<p>高齢者犯罪の増加の原因について従来言われてきたことは、高齢者の人数が増加したことによる犯罪者数の必然の増加と、いわゆる「キレル」人間の増加に原因を帰するという2つであった。前者については、平成20年版犯罪白書(法務省, 2008)により明確に否定されている。また、後者については、「キレル」人間の増加というのは実は理由としては薄弱である。なぜならば、「キレル」人間が増加しているならば、なぜどの世代にも等しく犯罪の増加が見られないのかが説明できないからである。犯罪者の増加が見られるのは高齢者の層だけである。以上より、本研究の出発点として、高齢者犯罪の増加は巷間言われている理由が主な理由ではないことをまず押さえたい。</p> <p>それに代わる原因として、本研究では以下のような仮説を提示する。高齢者に関わらず人間の生涯発達の観点から考えたとき、環境や周囲との折り合いのし方(統制)として、一次統制と二次統制が考えられる(Heckhausen, and Schulz, 1995 ; Rothbaum, Weisz, and Snyder, S. S., 1982)。一次統制は自己の欲求実現のために外部に働きかけることであり、二次統制は自己の欲求実現が困難なときに考え方を変えたりして自分の方が変わり周囲に適應することをさす。一般的に、加齢に伴い一次統制が優勢な年代から二次統制が優勢になる高齢世代へと変化するといわれている。また、一次統制は外部環境への働きかけであるからリスクテイキング傾向が高い行動である。一方、二次統制は自己の内部での認知的な機能であるからリスクテイキング傾向は低いといえる。したがって、加齢に伴い人間はリスクテイキング傾向が高い行動からリスクテイキング傾向が低い行動へと変化するといわれてきた。</p> <p>ところで、人間が問題解決や判断、意思決定を行う際には、必ず一定の状況や文脈の中で行うことが考えられる。この文脈をフレームという(Chong and Druckman, 2007)。そして、フレームがどのように与えられるかによって判断や意思決定の結果が異なることをフレーミング効果という(Tversky and Kahneman, 1981)。具体的には、ポジティブ・フレーム(良い面を強調する文脈)ではリスク回避選択が多く起こり、ネガティブ・フレーム(悪い面を強調する文脈)ではリスク志向選択が多く見られる。われわれはこれまでに、リスクテイキング傾向が弱い場合にフレームの影響に晒されやすいことを明らかにした(Shibutani and Watanabe, 2008; 渡部・澁谷, 2009)。</p> <p>さらに、社会情動的選択性理論によれば、高齢者は人生の残された時間を有意義に送ることを重視し情動的な満足が得られるような選択を行い、ポジティブな面に注目する傾向があるとされる(Carstensen and Mikels, 2005)。</p> <p>以上のことから、高齢者は二次統制が優位であり、したがってリスクテイキング傾向が弱いためにフレーミング効果が観察されやすい。そして、社会情動的選択性理論によればポジティブ・フレームを採用する傾向があるのでリスク回避選択を行うことが考えられる。以上の流れをまとめると、高齢者→二次統制→リスクテイキング傾向が弱い→フレームの影響に晒されやすい→ポジティブ・フレームを採用する傾向→リスク回避選択といえる。</p> <p>ところが、ここで自尊感情という新しい変数を考慮に入れると、自尊感情が低い高齢者→一次統制→リスクテイキング傾向が強い→フレームの影響に晒されにくい→リスク志向選択、といえる。以上の流れをたどってきた結果、高リスク行動である犯罪の増加がみられるということが本研究の仮説である。</p> <p>さらに、この仮説を実証した後に、自尊感情が低い高齢者のための認知介入訓練を行う。教室場面で自尊感情が低く学業成績も低い生徒のための訓練として再帰属訓練が効果を上げている(Hall et al., 2006)。そこで、自尊感情が低くリスク志向選択をしやすい高齢者と自尊感情が低く学業成績も低い生徒との間に一種の類似関係が存在するものと考え、高齢者に対して再帰属訓練を行いリスク志向選択行動の改善を試みる。</p> <p>(平成22年度三菱財団社会福祉事業・研究助成採択課題)</p>			

研究の独自性・アピール点

高齢者犯罪を高リスク行動の増加と捉え、フレーミング効果との関連性の中で考察を加えるという斬新な視点を採用する。さらに再帰属訓練による認知的介入を試みることによって改善を目指すという新しい可能性を追求するアプローチであるといえる。

期待される成果・波及効果

高齢者犯罪の増加が実はその背後に高齢者の認知機能の変化という隠された現象が生起していることを明らかにする点、および再帰属訓練による認知的介入によって高齢者に見られる高リスク行動の改善・抑制が期待される点の2点である。

関連する主な業績

Shibutani, H. and Watanabe, S. 2008 A comparison of binary and polytomous IRT models for analyzing a relationship between the risky choice framing effect and risk-seeking propensity. Proceedings of IASC2008.

渡部諭・澁谷泰秀 2008 フレーミング効果は高齢者のコミュニケーションにおいてどのような意味があるか 平成20年度大川情報通信基金助成報告書

キーワード

一次統制・二次統制、自尊感情、リスクテイキング傾向、フレーミング効果